

ちがいを認め合つて

小 六

思いやりとは、どのようなことでしょうか。優しく声をかけること、助けること、いろいろあると思います。でも、ぼくは思いやりが相手を傷つけることもあるのかもしれないと感じたことがあります。

ぼくは、生まれたときから左目に病気があります。それは「眼けん下垂」という病気で、左目のまぶたをうまく閉じたり、開いたりすることができない病気です。ぼくの目のことを知らない人は、ぼくの目のことを何気なく聞いてくることがあります。

「その目、どうしたの。」

「目、だいじょうぶ。」

みんな、何も知らないのです、心配して聞いてくるのだらうということも、ぼくなりには理解しているつもりです。でも、ぼくは、やっぱり目のことを聞かれるだけでとても悲しくいやな気持ちになるのです。そのようなときは、他の人とちがって何が悪い。ぼくは、ぼくなんだと、いつも心の中でさけんでいました。

おたふくかぜになって、病院に行ったことがありました。しんさつになって先生と話していると、先生は、

「その目、どうしたの。」

と、聞きました。ぼくは、おたふくかぜの病気を治してもらうために行ったのに、やっぱり目のことを聞かれるのだと、悲しくなったことを今でも覚えています。きっと、この先生も心配して聞いてくれたので

しよう。わかってはいますが、やはりとても悲しい気持ちになったのです。

そんなある日、買い物に行ったときのことです。車いすに乗った男の人を見かけました。ぼくはその人のことが気になって、知らないうちにその人のことをじっと見つめてしまいました。すると、その人と目が合いました。その人は、ぼくのことをとても悲しい目で見ていました。そのとき、ぼくは今、いつも自分がされていやなことを、車いすの人にもしてしまったのではなにか、と気付きました。ぼくは、目をそらしてその場からはなれました。決してその人のことをばかにする気持ちなんてなかったけれど、もしかしたら車いすの人は、悲しい気持ちになってしまったのかもかもしれません。

人は、みんなとちがうところが気になっ

てしまうことがあります。そのときに、優しい気持ちで声をかけたり、声をかけようと見つめたりしてしまうことがあります。しかし、このとき、人とのちがいに気を取られるのではなく、その人の気持ちや考えていることを想像し、その人の立場に立って、自分の言葉や行動を考えなければならぬと思います。

その人をまるごと受け入れるのはとても難しいことです。でも、この世界には、一人として同じ人などいないのです。だからこそ、一人一人のちがいを認め合うことがとても大切です。ぼくは、これからもちがいを認め合うことを大切にしながら生活していきたいです。